

## はじめに

弥生～古墳(続縄文)時代において、新潟県域を含む東北には異なる文化の接触域がモザイク状に点在し、時期や地域によってその実相も異なった。北限の前方後円墳の分布やその規模が日本海側と太平洋側で大きく異なるなど、北の古墳築造周縁域の動態には類似性が認められる一方で、差異も大きい。

時期による変化もあるが、古墳時代前・中期における北の古墳築造周縁域は蒲原平野・庄内平野・山形盆地・大崎平野・北上盆地である。これらの地域では、東北北部などの続縄文文化に多く認められる遺構／遺物が存在する時期(遺跡)がある。同様に、東北北部でも古墳文化に多く認められる遺構／遺物が存在する時期(遺跡)がある。

かつて藤本強は、北の古墳築造周縁域を「北のボカシの地域」と呼んだ(『日本列島の三つの文化 北の文化・中の文化・南の文化』同成社、2009年ほか)。藤本の「ボカシの地域」論には異論(橋本達也「古墳築造周縁域における境界形成」『考古学研究』58-4、2012年ほか)もある。しかしながら、古墳築造周縁域の研究は単なる地域史研究に留まらない。古墳築造社会の本質、当該社会の中核域と周縁域の関わり方(ヤマト政権の実態)といった課題を探るうえで、また日本列島史のうえでも重要な位置を占める。

古墳築造周縁域の重要な特徴は、総じて古墳が少なく、その築造が安定的に継続しないことである。個々の古墳の築造背景に迫ることは容易でないが、周縁域は古墳築造が低調であるがゆえに、中核域と比べて上記の課題にアプローチしやすい利点がある。地域社会がどのような状況になったとき、古墳が築造されたのか。その背景を探ることは、ヤマト政権中核(ヤマト王権)の政治／経済的関心事を探ることもつながる。周縁域は、古墳築造の意味や古墳築造社会の本質に迫るうえで欠かせない重要な研究フィールドなのである。

古墳築造の背景に迫る論点の一つとして、本書では続縄文文化との接触に着目した。主に古墳時代前・中期を対象に、古墳文化研究の立場から古墳や集

はじめに

落・生産遺跡の動向を整理し、北陸や福島、茨城県域などの古墳築造社会との関係にも目を向けつつ、総合的に古墳時代前・中期の地域社会を復元した。そのうえで、南の古墳築造周縁域(九州南部)の動態と比較し、北の古墳築造周縁域の特性や地域社会の変化、地域間関係に関して、現時点で指摘できることや今後の課題(展望)を明らかにすることを目指した。

北の古墳築造周縁域と東北北部の統縄文文化との関係については、これまでも太平洋側の資料から多くの研究が蓄積されてきた(藤沢敦「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』48-3, 2001年ほか)。また、南北の古墳築造周縁域の比較検討も行われてきた(鹿児島大学法文学部考古学研究室『東北・九州地域における古墳文化の受容と変容に関する比較研究』2000年ほか)。通時的な資料分析を経てはじめて捉えられる大きな変化はもちろんあり、重要な成果が導き出されてきた。しかし、時期を限定して網羅的、かつ詳細に分析した成果を比較検討するという点では、やや吟味不足の感が残る。また、北の古墳築造周縁域における東西差を見据えた比較検討も開始されてから日が浅い。このような研究状況に加え、太平洋側における古墳築造集団と東北北部の統縄文集団との交流のピークが古墳時代中期後半で、後期には見えにくくなることも重視し、本書では詳細な検討対象を古墳時代前・中期に絞った。また、統縄文文化には北海道域等も含まれるが、本書では北の古墳築造周縁域と接する東北北部との関係を詳細に分析することを優先し、基礎研究を着実に積み上げることとした。

本書の成果は各論文のとおりだが、ここでその要点を紹介しておこう。

藤沢敦は、古墳文化と統縄文文化の相互関係というテーマに関して、近年の研究を進展させてきた自身の研究成果を基に総論を展開したうえで、今後の検討課題と目指すべき研究の方向性を示した(第1部藤沢論文)。

橋本達也は、南北の古墳築造周縁域に関して、古墳築造動態の同調性の要因、および外部世界との関係における質的な差を示した(第1部橋本論文)。

小林昌二は出土木簡が実在性を示した「高志深江国造」に関連して、本拠地周辺(蒲原平野)の諸古墳がその成立過程や支配構造を探る重要な資料で、未発見/消滅古墳の存在も念頭に検討する必要性を説いた(第1部小林論文)。

水澤幸一は、城の山古墳(胎内)とその拠点集落・生産遺跡の動態を詳細に分析し、甘粕健による円墳論(「越後平野の首長系譜と円墳系首長墳」『新潟市歴史博物館

紀要』第1号, 2005年)を批判的に検討した(第Ⅱ部水澤論文)。

滝沢規朗は、越後出土統縄文土器と在地の弥生土器・土師器の併行関係を詳細に検討し、2次に大別できる統縄文集団の南下要因を推定した。また、土器様相の変化からうかがえる地域社会像を示した(第Ⅱ部滝沢論文)。

沢田敦は、南赤坂遺跡出土石器の使用痕分析を核とした機能研究等から、対象物の状態と固定法、着柄の有無、石器使用者を復元し、あわせて皮革処理のあり方の多様性を指摘した(第Ⅱ部沢田論文)。

高橋誠明は、古墳時代前・中期における大崎平野以北の「古墳社会」・「古墳系グループ」・「統縄文系グループ」の関係を整理し、三者が隔絶状態になく、相互に関係があったことを示した(第Ⅲ部高橋論文)。

高瀬克範は、石器使用痕分析の立場から皮革生産の商業性や黒曜石製石器の特質・運用方法、今後の発掘調査での留意事項をまとめた(第Ⅲ部高瀬論文)。

日高慎は、前期の大型古墳が集中する常陸を中心に、関東から東北へという視点も加味し、太平洋沿岸域での海上交通の重要性、さらに一見ただけでは古墳の諸要素に共通性を認められない大型古墳(梵天山古墳・玉山古墳・名取雷神山古墳)の築造の背後にある関係性(情報共有)を指摘した(第Ⅲ部日高論文)。

小黒は、東北日本海沿岸のネットワーク復元と北の古墳築造周縁域の東西比較から、統縄文集団との関係の変化や古墳築造の意味を分析した(総括)。

本書は、東北・関東前方後円墳研究会が2014年2月15・16日に開催した第19回新潟大会「古墳築造周縁域における古墳時代前・中期の社会と地域間関係」(新潟市歴史博物館共催, 新潟県考古学会後援)の成果を基礎としている。藤沢・滝沢・水澤・高橋・日高・橋本・沢田による基調報告を踏まえた総合討議の成果の大要は、資料の詳細な分析から次の諸点を再確認できたことにある。それは、古墳築造周縁域だからこそ把握しやすい点でもあった。

- ①地域での必要性、およびヤマト王権を中心とした広域の政治／経済的動向のなかで見せるための大型古墳が築造され、その背後には広域のネットワーク網があった。統縄文集団とつながるネットワークもその一つだった。
- ②ヤマト王権が古墳築造周縁域を直接的、かつ継続的に掌握していたとは考えにくく、地域の動向にヤマト王権が便乗したと見るべきである。

はじめに

③古墳築造の消長は、地域要因のほか、ヤマト王権の政治的変動がネットワーク網の変動を誘発したこと(ヤマト王権との関係の変化)にもよる。

④既存の定説的解釈に資料を安易に結びつけることは厳に慎み、理論的検討を含め、資料の実態に即して慎重に解釈する必要がある。

なお、④は成果と同時に課題でもある。考古資料と真摯に向き合い、基礎研究を重ねて得た解釈を堅実に積み上げていく姿勢の重要性を共有した。

本書では、新潟大会の基調報告者7名が総合討議を踏まえて書き下ろした新論文のほか、日本古代史(文献史学)の小林昌二、石器使用痕分析の高瀬克範の参加も得て、多方面からの検討を加えた。また、北の古墳築造周縁域と東北部の続縄文社会における主な遺跡の紹介も付し、読者の利便性向上に努めた。これは、研究成果を学界だけでなく一般市民にも広く還元し、考古学の裾野を広げることに力を注いだ東北・関東前方後円墳研究会代表幹事、故・甘粕健先生のご遺志を継ぐものである。

本書では、遺跡紹介の記載項目等がある程度調整したほかは執筆者の見解を全面的に尊重し、それぞれの用語で所説を自由に述べてもらった。同じ資料でも、例えば第Ⅱ部と総括のように、重視する視点や立場の違いによって多様な見方があることを実感いただけるだろう。地域の資料実態等に精通する執筆者が詳細に分析した成果を持ち寄って一書に編んだ本書が、東北の複雑な地域社会を読み解く一助となることを願ってやまない。古墳築造集団と続縄文集団の交流、古墳築造の意味、ネットワークなどに関心をお持ちの方にとって、本書が幾ばくかでもお役に立てば、執筆者一同、望外の喜びである。

なお、企画段階からご協力・ご配慮いただいた高志書院の濱久年氏に深謝します。故・甘粕代表幹事が注目されていたテーマにかかる共同研究論文集として本書を上梓できることを執筆者および東北・関東前方後円墳研究会会員一同の喜びとし、研究会活動を発展させることで頂戴した学恩に報いたい。

2014年8月4日 故・甘粕健先生のご命日に

東北・関東前方後円墳研究会企画幹事

小黒 智久

# 目 次

はじめに

## 第Ⅰ部 古墳文化と続縄文の世界

古墳文化と続縄文文化の相互関係——藤沢 敦 9

九州南部の古墳築造と南北周縁域の比較——橋本 達也 29

古代史研究と北疆の古墳——小林 昌二 45

## 第Ⅱ部 日本海側の動向

縁辺の古墳と在地社会——水澤 幸一 57

続縄文土器と在地土器の併行関係——滝沢 規朗 79

スクレイパーの機能とその担い手——沢田 敦 99

事例報告—— 115

①南赤坂遺跡／②菖蒲塚古墳／③御井戸A遺跡・御井戸B遺跡／④山谷古墳／⑤緒立八幡宮古墳／⑥古津八幡山古墳／⑦城の山古墳／⑧天野遺跡／⑨兵衛遺跡／⑩菱津石棺／⑪山田遺跡／⑫大塚天神古墳／⑬寒川Ⅱ遺跡／⑭宮崎遺跡

## 第Ⅲ部 東北・太平洋側の動向

古墳築造周縁域の地域社会の動向——高橋 誠明 175

北上川流域における続縄文系石器の使用痕分析——高瀬 克範 195

常陸の前期大型古墳と北方の地域社会——日高 慎 211

事例報告—— 235

①伊治城跡／②木戸脇裏遺跡／③大塚森古墳／④大黒森古墳／⑤保土塚古墳／⑥山前遺跡／⑦西屋敷1号墳／⑧永福寺山遺跡／⑨角塚古墳／⑩中半入遺跡／⑪市子林遺跡／⑫田向冷水遺跡

総括

北の古墳築造周縁域と続縄文社会——小黒 智久 285

執筆者一覧 306

東北・関東前方後円墳研究会の歩み 307